

せん断力を受けるプレートガーダーの設計規準と極限強度  
に対する安全性について

大阪大学 工学部 土木工学科 小松達也  
同 〇西村宣男

1. まえがき

プレートガーダー。後座底座度に関する多くの研究が進められて、軸の極限強度と腹板幅厚比、フランジ剛度、補剛材剛度及びハーフピッチの aspect ratio 等との関係式定式化が明らかにされてきたが、今後は示方書、設計指針として実際の設計にその成果を反映するこことが望まれる。設計指針等ではプレートガーダーを構成する全ての要素の強度に対する影響を考慮して厳密式を用ひることは不便が多いし、その内容を包含してざるだす簡便な形で表現されなければならない。

今回、鋼道路橋示方書、設計に際してプレートガーダーの腹板幅厚比、補剛材剛度、フランジ裏板等に関する条項を改められようとしている。主な改正点を表 1 に示す。現行示方書で規定している腹板幅厚比、垂直補剛材剛度、腹板底座層に対する安全率を根拠として定められたが、示方書改訂案では表現上、現行規定と同様、腹板底座層を基準としているが、底座安全率としてプレートガーダー破壊実験より得た極限強度を考慮したものを使用している。プレートガーダー腹板安全率は現行示方書では、曲げに対するせん断に対する 1.4 であるが、たゞ、設計案では応力比  $\psi = \tau/\sigma$ 、 $\psi = \sigma_1/\sigma$  を用いて安全率の一般式を示す形とした。

$$\psi_B = 1.25 + (0.30 + 0.15 \psi) e^{-\frac{\psi}{1.4}} \geq 1.25 \quad (1)$$

従て、曲げに対する現行比 1.4 であるが、純せん断に対する 1.25 となる。上式は 1967 年大阪大学で行なった一連のプレートガーダー破壊実験に基づいたものである。

本研究は筆者、1 人が先に発表したプレートガーダーせん断パネルの極限強度算定式を用ひて、示方書改訂案に沿って設計されたプレートガーダーせん断パネルの安全性について検討を加えたものである。

項目	鋼種	水平補剛材数	改訂案	現行示方書	項目	改訂案	現行示方書
腹板幅厚比	SS41	0	152	160	水平補剛材 1 レ	$\frac{a/b \leq 1}{(\frac{b}{100t})^4 \left( \frac{(\sigma)}{3650} \right)^2 \left[ \frac{\tau}{810+610(b/a)} \right]^2 \leq 1}$	SS41
		1	256	259			$(\frac{\sigma}{1400})^2 + \left( \frac{\tau}{(3100/4)} \right)^2 \leq 1$
		2	360	306			SM50
	SM50	0	130	136	水平補剛材 1	$\frac{a/b > 0.8}{(\frac{b}{100t})^4 \left( \frac{(\sigma)}{9500} \right)^2 \left[ \frac{\tau}{1270+610(b/a)} \right]^2 \leq 1}$	$(\frac{\sigma}{1400})^2 + \left( \frac{\tau}{(3100/4)} \right)^2 \leq 1$
		1	220	220			SM53
		2	310	260			$(\frac{\sigma}{2100})^2 + \left( \frac{\tau}{(3100/4)} \right)^2 \leq 1$
側限	SM50Y	0	123	128	水平補剛材 2	$\frac{a/b \leq 0.8}{(\frac{b}{100t})^4 \left( \frac{(\sigma)}{9500} \right)^2 \left[ \frac{\tau}{950+810(b/a)} \right]^2 \leq 1}$	SM50
		1	209	207			$(\frac{\sigma}{2600})^2 + \left( \frac{\tau}{(3100/4)} \right)^2 \leq 1$
		2	294	245			
	SM53	0	110	112			
		1	188	183			
		2	262	216			

表 1 現行示方書と改訂案の比較

## 2. セン断パネルの破壊機構と極限強度

筆者の1人より数多くのフレートガーダー破壊実験に基づいて、セン断パネルの破壊機構として、図1に示す4つのモードを提案した。

フランジ強度が小さい場合には荷重の増加とともにまずフランジが曲げを受けて図1(a)に示すようにパネルの脚部A, Bと中間点Cに塑性ヒンジが発生する。更に荷重が増すと腹板中央領域(いわゆる斜張力端)の引張応力増加により降伏が進行しパネルの極限状態に至る。このことを極限せん断力とする。

$$Q_1 = \frac{1}{2} (\sigma_{wy} - 2\tau_{cr} \sin 2\theta) \left\{ b \sin 2\theta - \alpha(1 - \cos 2\theta) \right\} t_w + \frac{4\alpha M_p}{c(a-c)} + \tau_{cr} b t_w \quad (2)$$

式(2)で与えられる。これがモード1の破壊モードである。式中  $\sigma_{wy}$ : 腹板降伏応力,  $\tau_{cr}$ : 腹板座屈応力,  $t_w$ : 腹板厚を表す。  $M_p$  はフランジの全塑性モーメントで  $M_p = f_{fy} \cdot b_f \cdot t_f^2 / 4$ , 斜張力の方向印字次式で与えられる。

$$\sigma_{wy} (b \cos 2\theta - \alpha \sin 2\theta) + 2\tau_{cr} [\alpha(\cos 2\theta - \cos 4\theta) - b \sin 4\theta] = 0 \quad (3)$$

$$\Rightarrow \alpha = (a-c/z)a / (a-c/2), \text{ 又塑性ヒンジ位置 } C \text{ は}$$

$$C = \frac{1.78 M_p / \sigma_{wy} b^2 t_w + 0.38}{2(1 + 1.78 M_p / \sigma_{wy} b^2 t_w)} a \quad (4)$$

モード2のフランジ強度式十分とする

$$\{E_t \sin^3 \theta \cos \theta t_w (a-c) - 4M_p/c\} / (a-c/2) \leq 0$$

の範囲では、腹板が全面降伏してもフランジが崩壊しない。このとき破壊機構は図1(c), (d)に示す、モード3となる。腹板の幅厚比が大きくなると座屈応力  $\tau_{cr}$  が小さくして  $\sigma_{wy} - 4\tau_{cr} \geq 0$  の成立する領域では  $\theta = \pi/4$  となりモード3となる。極限せん断力は

$$Q_2 = \frac{1}{2} \sigma_{wy} b t_w + \frac{4M_p}{a} \quad (5)$$

腹板せん断座屈応力が大きくなると  $\sigma_{wy} - 4\tau_{cr} < 0$  の領域では  $\theta < \pi/4$  となる破壊機構はモード1となる。極限せん断力は

$$Q_3 = \left\{ \frac{1}{2} \sigma_{wy} \sin 2\theta_0 + \tau_{cr} (1 - \sin^2 2\theta_0) \right\} b t_w \quad (6)$$

$$\Rightarrow \theta_0 = \frac{1}{2} \sin^{-1} \frac{\sigma_{wy}}{4\tau_{cr}}$$

又、モード1からモード3・モード4への遷移状態としてモード2が生ずる。このとき張力場の方向は

$$(\sigma_{wy} - 2\tau_{cr} \sin 2\theta) \sin^2 \theta t_w - \frac{16}{\alpha^2} M_p = 0 \quad (7)$$

極限せん断力  $Q_2$  は式(6)で与えられる。

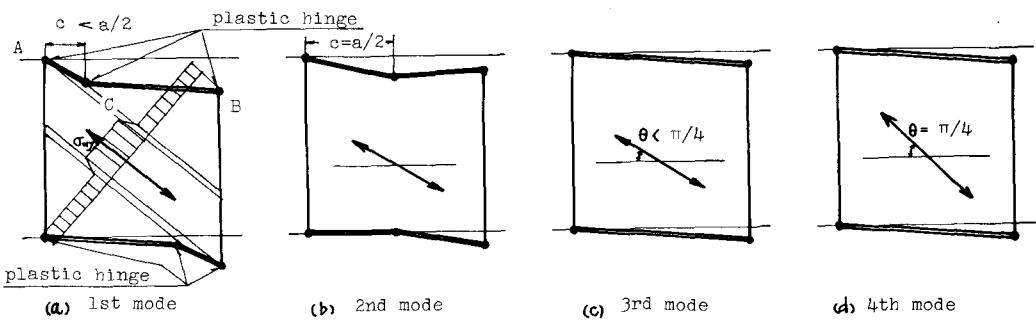


図1. せん断パネルの破壊機構

### 3. 横用設計法・安全性

プレートガーダー腹板の設計は図2に示すような順序で行はわれる。桁高/断面高アスペクト比を対象として決定されるから、せん断力の卓越する桁端部等ではせん断力、桁高がinput dataとして与えられる。又フランジ断面積も断面高アスペクト比を対象として決定される。せん断パネルでの設計の対象から外されている。これらのinput dataに対して横用設計法では鋼種、水平補剛材間隔、垂直補剛材間隔、補剛材剛性及び腹板厚が決定される。現行の示方書ではこの内に腹板幅厚比と垂直補剛材間隔の決定は腹板座屈に対する安全性を基準にして計算法が取入れられている。

示方書設計法や設計法としては、現行示方書とはほとんど相違ないが、腹板幅厚比、垂直補剛材間隔の計算にパネルの後座屈強度を考慮して安全率を採用するなどにより、合理的な設計へ一歩前進した。前述に示した極限強度計算式を用ひ、プレートガーダーせん断パネルの安全性を図3に示すように計算法ごとに角度から検討した。

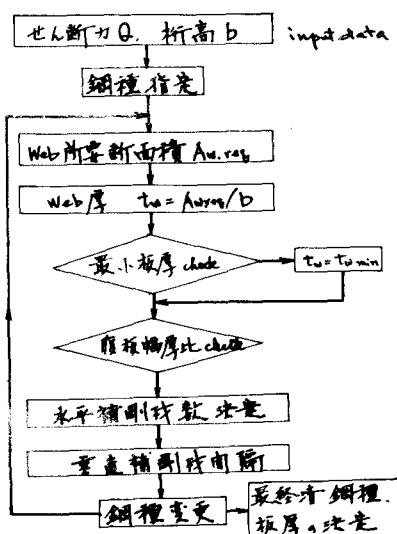


図2. 横用設計法のフロー

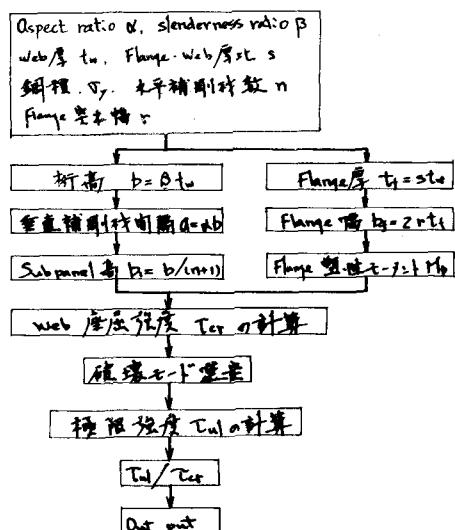


図3. 安全性検討のフロー

### (1) Aspect ratio

図4は各鋼種ごと、水平補剛材数0, 1, 2、腹板幅厚比を示す方程式計算の制限値いっぽんとした場合の、アーチバーせん断バネルの極限強度 $\sigma_{ul}$ 、腹板座屈応力度 $\sigma_{cr}$ 及び $\sigma_{ul}/\sigma_{cr}$ とパネル aspect ratio の関係を示した。図中、横鎖線(太線)に示す材料安全率を腹板せん断座屈安全率1.25で除して安全性の指標を表す。縦鎖線は左よりそれぞれ水平補剛材数0, 1, 2のときの方程式計算で求められた垂直補剛材間隔を用いた aspect ratio である。

パネルの極限強度 $\sigma_{ul}$ を腹板座屈強度 $\sigma_{cr}$ で除して値 $\sigma_{ul}/\sigma_{cr}$ (以下極限強度比と称す)が横鎖線より大きくなる場合、パネルは腹板座屈に対する1.25の安全率を保てば、極限強度に対して腹板の材料安全率以上の安全率をもつことになる。

Aspect ratio が大きくなると極限強度も座屈強度も低下するが、座屈強度の低下が著しいので、極限強度比は必然的に増加する。Aspect ratio が若干程度大きくなると、腹板座屈強度も極限強度も低下率が一様となり、2. 極限強度比は一定となる。

方程式の端、設計されたアーチバーの極限強度比は $\sigma_{ul}/\sigma_{cr}$ 曲線と縦鎖線の交点(○印)で与えられる。図4(a)～(d) は各鋼種について方程式端、設計されたアーチバーの安全性が確認された。

### (2) 腹板幅厚比

同一強度、フランジを用い、かつ $b/t_f$ を一定にした場合について考える。腹板幅厚比に対する極限強度及ぶ腹板座屈強度の変化も aspect ratio と同様の傾向が見られる。すなわち腹板幅厚比 $b/t_f$ の増加につれて、せん断パネルの破壊機構はオードモードから中間的状態のオーセードを経て $b/t_f$ が大きくなるとオードモードに移る。図5で a-bがオードモード b-cがオースード c-dがオードモードの領域である。

方程式計算の規定する腹板幅厚比の範囲は、破壊機構は1. 2, 3モードのときオードが現われない。しかし純強力端であるオムモードは方程式計算外の腹板幅厚比の大きな領域で、可能な限り、航空機でみられるような腹板幅が極めて薄く、且つフランジ強度の大きい場合のみ出現する。

### (3) フランジ強度

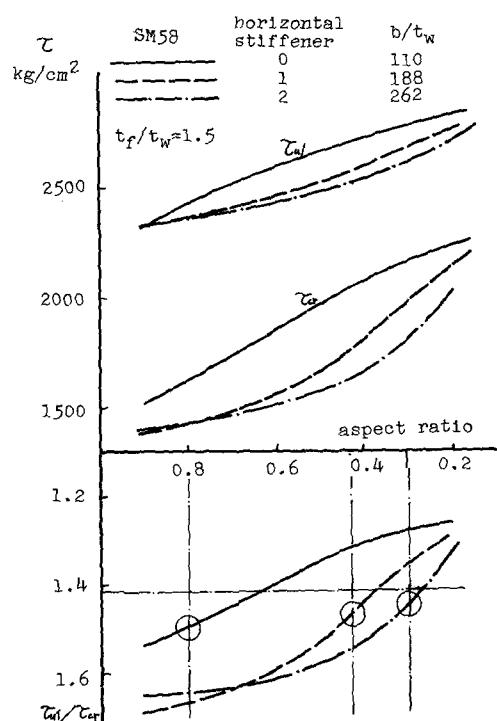
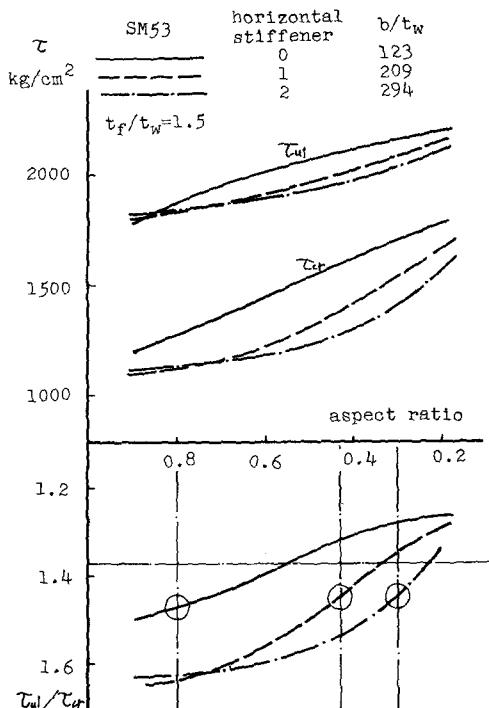
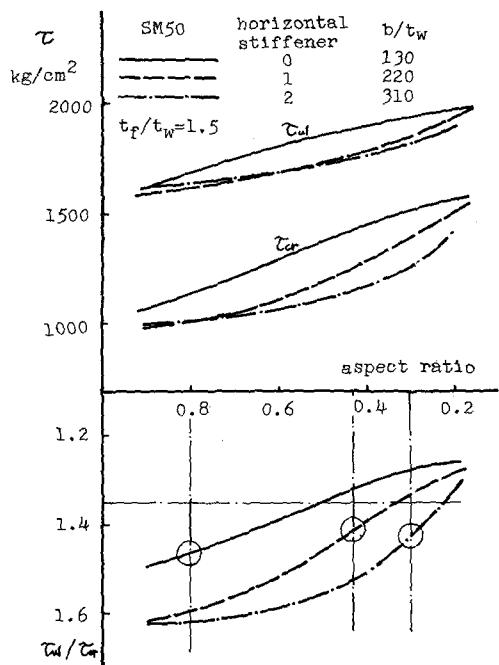
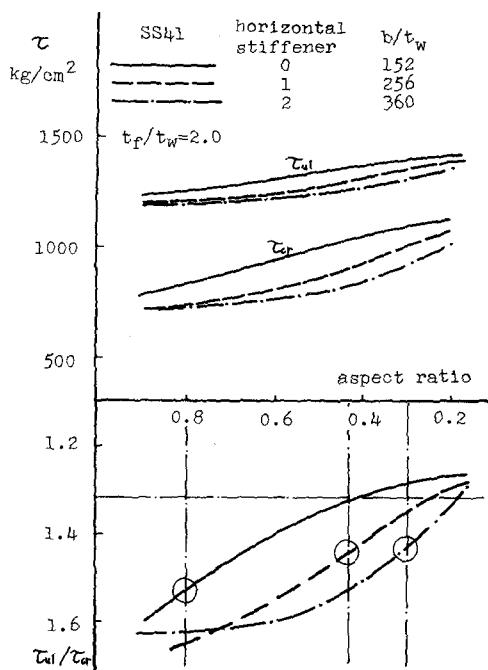
図6(a)～(d) はパネルの極限強度と、フランジ・ウェブ幅厚比の関係を示したものである。フランジ強度は次の方法で計算する。与えられた板厚比をウェブ厚にかけてフランジ厚とすると。フランジ幅は方程式によって最も幅広、突出幅を設計されたものとし、その2倍をフランジ厚にかけて与えられる。従ってフランジの全塑性モーメントは  $M_p = \sigma_{fy} \cdot t_f^3 \cdot r/2$  と与えられる。これはフランジ突出幅・相厚比である。

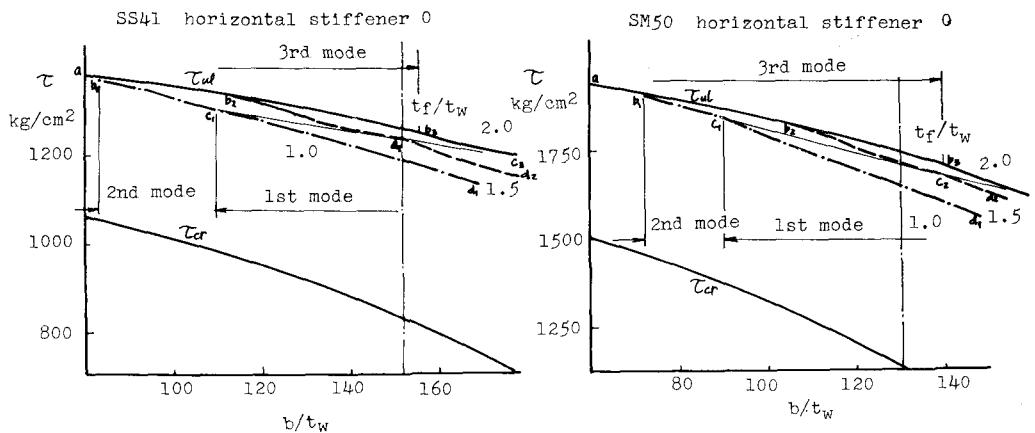
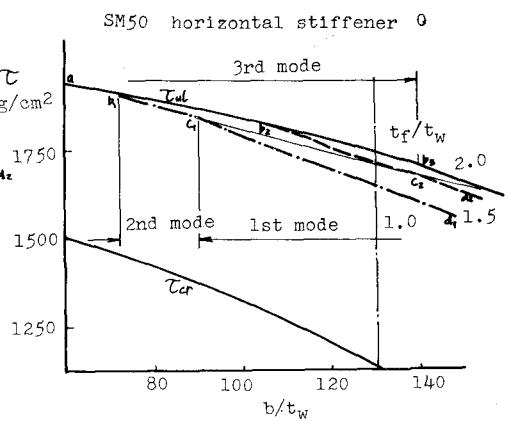
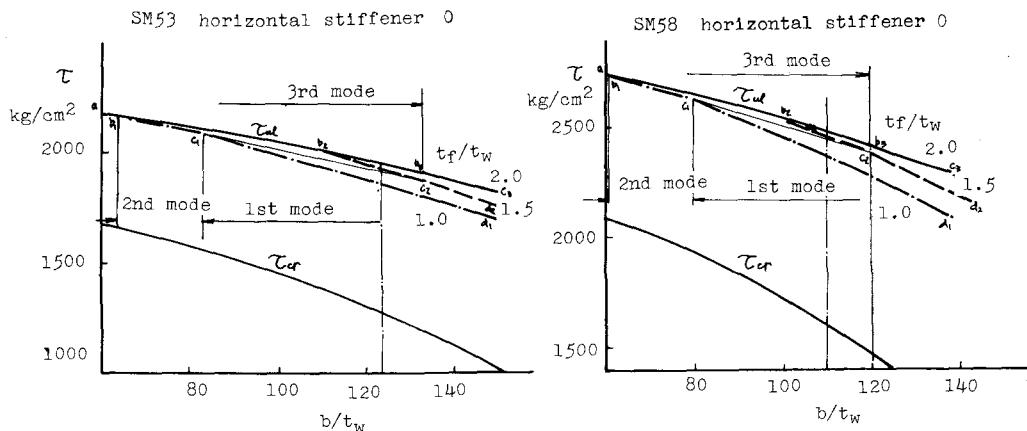
鋼種	SS41	SM50	SM53	SM58
$\sigma_y$	130 MPa	3.200	3.600	4.600
$\sigma_a$	1.400	1.900	2.100	2.600
$D$	1.64	1.68	1.71	1.77

表2. 鋼材の安全率

鋼種	SS41	SM50	SM53	SM58
$b_f/t_f$	14	13	12	10

表3. フランジ突出幅



図 5(a)  $\tau_{ul}, \tau_{cr} - b/t_w$ 図 5(b)  $\tau_{ul}, \tau_{cr} - b/t_w$ 図 5(c)  $\tau_{ul}, \tau_{cr} - b/t_w$ 図 5(d)  $\tau_{ul}, \tau_{cr} - b/t_w$ 

フランジ強度を大きく、すなわちフランジ・ウェブ板厚比を大きにしていくと、パネルの破壊機構はオ1モードからオ2モード、オ3モードと変化する。極限強度はオ2モードからオ3モードへ変わると点が最大値となり、それ以上フランジ強度を増してもパネルの耐荷力を上昇する結果をもたらす。従って、せん断パネルの極限強度の観点からするとフランジ強度はオ2破壊モードとオ3モードの遷移点を与える程度のものを適用する最も合理的である。本研究で用いたフランジ強度算定法では図6(a)～(d)から明らかのように、フランジ・ウェブ板厚比2.0程度が二の遷移点に相当する。

ところで、せん断パネルにおいてはフランジに作用する垂直応力度が極めて小さいので、フランジ強度が前節に示したように板厚の2乗に比例するところから、同じフランジ強度を持たせた場合には、フランジ幅を大きくするより板厚を増すことが半である。フランジ裏板幅の規定は曲ゲーネーントによる圧縮応力に対する局部屈展より定められたものである。2.せん断パネルではアーリートゲーネー製作、等效上必要な最小のフランジ幅に下限がある。上の理由が合理的であると思われる。

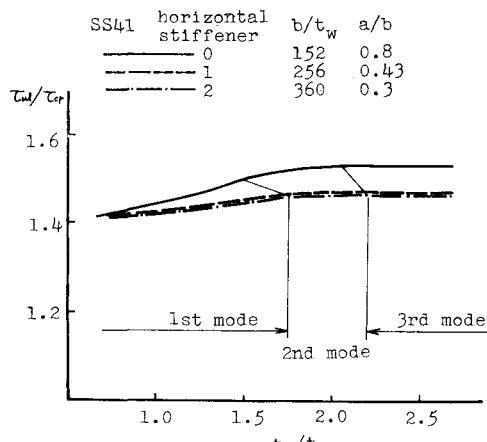


図6(ca)  $\tau_w/t_{cr} - t_f/t_w$

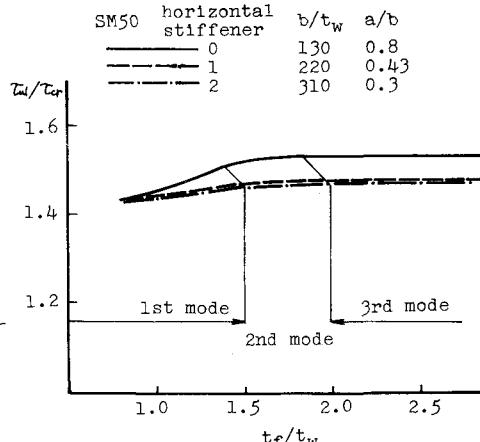


図6(cb)  $\tau_w/t_{cr} - t_f/t_w$

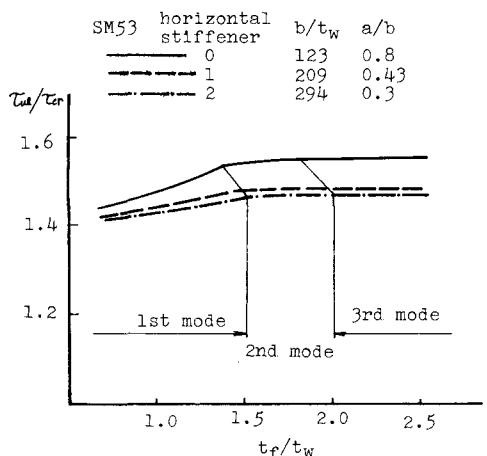


図6(cc)  $\tau_w/t_{cr} - t_f/t_w$

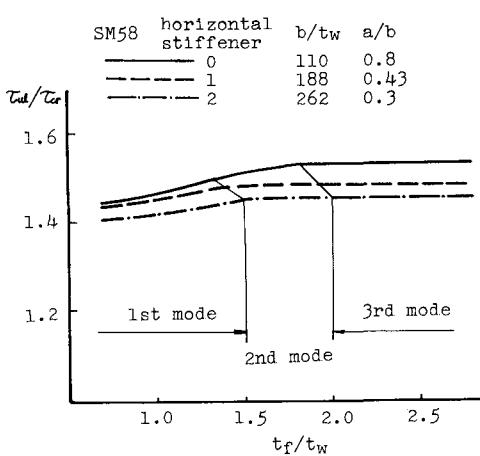


図6(cd)  $\tau_w/t_{cr} - t_f/t_w$

ジフランジ強度(塑性モーメント)を無次元化して、遷移点の値を表示すると

$$\frac{M_p}{\sigma_{f_w} \beta t_w^3} = \frac{\sigma_y}{\sigma_{f_w}} \cdot r \cdot \left( \frac{t_f}{t_w} \right)^3 \quad (8)$$

Hybrid girder における  $\sigma_y = \sigma_{f_w}$  だから (8)式のこの値は、水平補剛材数 0, 1, 2 の場合、鋼種によらず影響されない。それそれ 0.4, 0.23 及び 0.16 程度である。

#### 4. 結論

示方書改定案は腹板の構造に幅厚比強度を考慮して安全率を導入した結果は水平補剛材を有する場合に現われている。水平補剛材2本の場合、現行示方書に比較して、ほゞ 1.2 倍程度の腹板幅厚比の使用が可能となる。しかし前節で考察したように、そのような大きさの腹板幅厚比を用いても、極限強度に対する割合も材料安全率以上の安全性が確保されてはいるが明らかとなる。

現行示方書改定案ではせん断ペネルのフランジの設計に関して、何も触れていないが前

節に示してあるようにフランジ強度とパネルの極限強度の間に、明白な特徴的な傾向が示されている。アーチバー設計。際にこれを配慮する旨指針で示されることが望ましい。

腹板座屈といつてアーチバーの強度とは直接関係ない、理験を封じて漠然とした安全性の検討を行ひ、この現行示方書に較べて、改訂案では腹板座屈強度を配慮するに至り、この設計の合理化へ一步前進したものとして評価できると思われる。更にアーチバーの絶縁層強度を十分有効に利用する可能性も示す。示方書改訂案の規定による腹板幅厚比より大きな領域に残されている。経済性から計算十分の余地があると思われるが、変形量、製作面からまだ問題が残されている。更にアーチバーの強度について研究が重ねられるべきもの。設計法、製作法の改良がなされなければならぬところである。

今後取扱いせん断力の伸びなく、曲げモーメントを受ける場合、曲げモーメントと荷重との場合についても、式(4)の意義を、今後の理論解析に合せて比較検討してゆきたい。

### 参考文献

1. S. Komatsu : Ultimate Strength of Stiffened Plate Girders subjected to Shear  
IABSE colloquium 1971
2. 日本道路協会 : 鋼直路橋設計示方書
3. 日本道路協会 : 密密鋼直路橋設計示方書
4. Rockey, K.C., and M. Skaloud : Influence of flange stiffness upon the load carrying capacity of webs in shear, 8th Congress IABSE 1968
5. Butler, K. : Strength of plate girder in Shear  
ASCE - ST. 1963
6. Fielding, D. J. and P. B. Cooper : Static shear test on longitudinally stiffened plate girders  
Fritz Engg. laboratory Report, 1965
7. Skaloud, M. : Ultimate load and failure mechanism of webs of large width-of-thickness ratios, subjected to shear and attached to flanges of various flexural rigidities  
IABSE colloquium, 1971